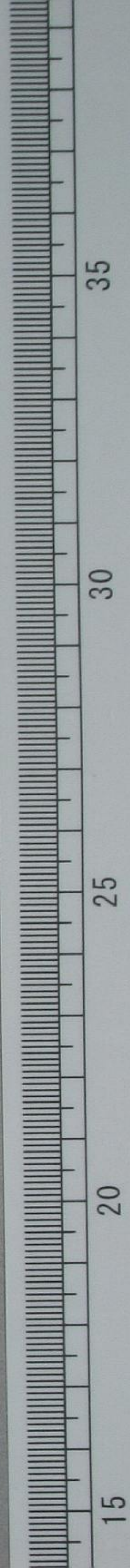




國のすゝめ

三島通庸著

柳田文庫
文庫11
A1609



文庫11
A1609

敬言視總監從三位勲三等三島三著

國のよそごた

東京書肆 十一堂發兌



國の姿序

九る世の花といふ花を見らば
其特性がありて一様でない牡丹
の牡丹の姿は芍薬の芍薬の姿は芍
薬の花の姿は牡丹の姿を
摘みて故に芍薬の枝は芍薬の

序

世々とするは天徳の理あり明ける
如く國あり國の妾あり家あり家
の次女あり必しも他國他家の
風を採りて強し移すべき也
なほ唯其も此の妾は係を短
すは長くや一足らぬを補ひし

草木をお得し立つる如くを
えんたや立教べきである本邦の
如きむし一玉一家の妾は十とある
しこの今ハ外國交際し如きあり外
國の風依り移るふつけしハ我が國
の妾古人のありしやうも辨へるべき

はならぬをこぼして書を見らば
めて小冊子なれども建國の由來を
始めて夫氏の突係り知らば
彼の一枝を以て花の特性を
らるゝかぬくぞりし世人は世
字にしては國の次女を守ぬゆふ

ゆふべき文明の種子を蒔き
大輪の花を結ませ留貴の花
受あせしものである

大藏大臣後征勲一等伯爵松方正義



淡のあはれをいせぬは... 大勢と権をいせぬは... ちとくか又思ひぬか...

自序

人の國を思ふは天竺の情よりていそ深淺
厚の薄ちて國の貧富強弱ともあるものな
れは國に富められたる人々を國を思はざ
らざるまじきものなるを彼の類も昔
の古き流の時勢をも辨へていせぬは
いにしへのまじきものなるをいせぬは
るる愛國説も言ひつれば國陋も同きて

ふせよんくしんいへあをせしめし物語り
嘆きてもまじく驚くべし事なるべし。余毎
西洋より傳へたる人の話せし國がまじく物語り
ては夢國なるべし。其の事いふは富強
ありとも、理のまじくせしめしりし物
は、わが部下の人の言ふも國の要する人の
言ふも、まじく驚くべし。其の事いふは
のまじく驚くべし。其の事いふは

あしきまじくいふは——其の事いふは物
集氏の語をたふさふべし。其の事いふは
語りぞつて、いふは、此意はくまじく物
は、まじく驚くべし。其の事いふは、
いふは、まじく驚くべし。其の事いふは、
歸らしむるべし。其の事いふは、
いふは、まじく驚くべし。其の事いふは、
いふは、まじく驚くべし。其の事いふは、

國のすがる。天皇の臨
 御。御座の御衣。御製
 後醍醐天皇の御製
 寒夜の御衣
 民の煙り
 歴朝の仁慈
 天祖の恵み
 君のめぐみ
 總論
 一

明治十九年十二月

柳田泉文庫

國のすがる。天皇の臨

標目 御座の御衣

一 總論

一 君のめぐみ

天祖の恵み

歴朝の仁慈

民の煙り

寒夜の御衣

後醍醐天皇の御製

一 民のこころ

國のすがる

目

邦人の祖先

朝敵必滅の諺

君を招ける領中

執もれ人の孤忠

海外の服従

弘安の武断

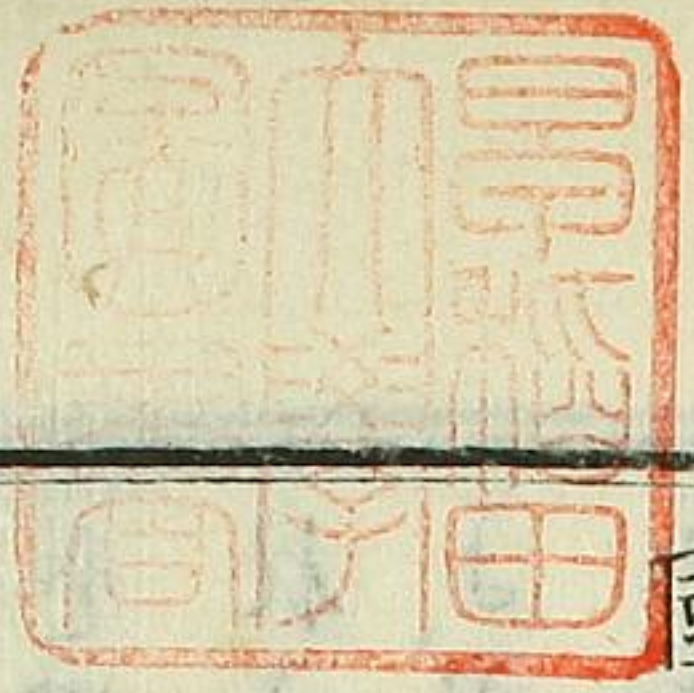
宇佐宮の神勅

秋思の詩

如意輪堂の過去帳

聖武天皇の詔

國のすがら



總論

從三位三島通庸 著

人類の相集ひて、國を成すに至れるも、種々の謂れある可しと雖ども、打ちまうせていふ時を國ハ、人の集合體、人を國の分子とや、いふ可らん。さるるも、物の強弱も、其分子の疎密も、關し、其集合の形狀も、關するが如く、國の強弱も、唯、其疆域の廣狹のみをも、依らじう。本邦の如きを、疆

國の事
域の他邦も優るともあらねど、開闢以來、一系の天皇を戴きて、東海中に屹立すること、幾千歳よりなりけん。神武天皇よりこそ、既に、二千五百餘年の星霜を経り、古來、外侮も受けざりしを、本邦人の生れ得て、剛勇なるも、依るべしと雖ども、殊も、君民のなうらひの、他邦と異りて、君の民を惠み、民の君を敬ふことの、優れらるるも、ぞ依らるべき。つらく、上代のやうを思ふよ、君も、父兄の如く、民も、子弟の如く、よして、君民のさま、一家族の如くなり、民も、君の爲め

よ、職業を勧めて、弓弭の貢ぎ、手末の貢を獻り、君も、民の爲め、養蠶耕耘の、わざを教へて、早魃も、雨を乞ひ、霖雨も、晴れを祈り、ひさすら、其安寧を慮り給ひき。されど、高臺に登り給ひても、民の煙り、御心よかり給ひ、寒夜に會ひ給ひても、民の肌より、おぼしめて給へり。さるるも、人の家は、在れど、家の富むを、願ふが如く、國は孕れても、國の榮えを、願ふなるも、一般の情なれども、國を榮えしめんも、先づ、其國のあるやうを、辨へて、其榮ゆべきも、この謂れより、知らざる可らず。抑も、

本邦の習俗も、君民、一家族の如くなれむ、忠をもて、君も仕へ、孝をもて、親も事あるのみならず。君も仕ふるも、忠と孝とを、兼ぬる故も、珍らしき例もありて、近くを、彼の六百年來の幕政も、立ちどころも、朝廷も還り、數百の諸侯も、たちまちよして、藩籍を奉還せしが如き、他邦も類ひなき事もおで来ぬ。殊も、國民の、剛勇なるも、類ひなき、習俗もて、兵役を避くるもの、年々も減りつゝ、漸く、競ふものさへあり。あそれ本邦も生れおで、此美俗の人と為り、更も、聖世も遭遇して、文明の

域も進むを、まことよ、千歳の一時なれむ、學士も、學術を研き、兵員も、武事を究め、農工商も、各々、其業を勵みて、古人の、古時も勉め、つゝ、如く、相睦び、相親しみて、野中の清水も、この心を、失はず、名も負へる、日の本の、國の光りを、萬代も、遠く、久しく、輝かし、なんものよこそ、

君の恵み

新續古今集

天が下の、のどろなる世も、ちりよけり、きみがめぐるみや、四方も満ちぬる。

神代のむら、天祖、あかく、蒼生を愛しみ、給ひて、養蠶、耕耘の、わざも、いふも更なり。醫藥の方、航海の術を、さへ、傳へ、給ひて、衣食住の道、なごりな

く教へ給ひしを、民皆其業よ安んじしを、
天祖をほ蒼生の安穩をおぼして、天孫瓊々杵尊
を、天下の君と定め、其御璽として、草薙劔八尺曲
瓊、八咫鏡を賜ひ、五伴緒神を添へて、天降し給ひ
よき。五伴緒とも、五族の天祖、其八咫鏡を賜ふ時、
長と、りしんが如し。天祖、其八咫鏡を賜ふ時、
殊よ、ことほぎ給ひて、此御鏡を視ること、吾れを、
視るが如くすべし。寶祚の隆えまさんことを、天
壤と無窮なるべしと、宣ひしりしが、神武天皇よ
至りて、始めて、都を大和國の橿原よ建て給ひし
りむ、やがて、神器を、宮中よ祀り、鳥見の山中よを、

靈時をも設けて、皇祖天神を祭り、専ら、忠孝の道
を教へて、風俗を淳りしめ給ひき。まよ、常よ、天
祖の御心を御心として、民を愛しみ給ひしりむ、
大和平定の後を、故さらし、人を、四方よ遣をして、
農桑の業をも、勧め給ひし間、代々の帝、亦皆、其御
心を継がせ給ひて、池溝をほり、原野を開き、勉め
て、其衣食住を、厚りしめんと、謀り給をざりし
も、無りしき。殊よ、仁徳天皇を、御名の如く、仁徳の
君よおとして、嘗て、難波の、高津宮よおをせしが、
或日、皇后と、高臺の上よ、登り給ひて、遙るくと、見

渡し給ふほどよ、四方の景色晴れりて、煙り籠めたる隈も無きよ、痛く歎け給ひ、此都に、かゝらんまを、況して、遠き國々も、如何なるべきぞ、民の竈、さこそを、貧しうらめとて、諸の貢物、諸の課役を、免し給ひ、間、宮殿、破れ壞れて、雨漏り、風とほせども、繕ひ給へぬむ、袞龍の御衣も、濕ひ、夜のおとぐも、冷やりなれども、さながらよ、三年を過ぐして、まゝ、高臺より眺め給へむ、家毎よ、煙り満ちて、のどやりよ、見渡され給ふよ、あもれ、朕れ富めりと、悦び給ふを、皇后、聞き咎め給ひて、宮

殿らぼれて、風雨をどた、支へぬものを、いりて、をともども、給へむ、天皇宣ふやう、君を、民の為めよ、在るものなれむ、民の富めたる、君の富めたるなり。今、民の煙り、ゆるうよ、靡きて、四方、やうくよ、賑ひぬるを、やがて、朕が富めたるならずや。民、みな貧しうらま、うらむ、朕れ、ひとり、いりて、うらむ、富まんやとて、群臣の、今を、と、勧め奉るをも、聽き入れ給へず。更よ、猶、三年の間を、免し給ひて、始めて、宮殿を、造らせ給ひ、程よ、四方の民、悦び、勇みて、老幼男女、集へざるよ、集ひ来るもの、日夜よ、絶ゆるこ

と無く、石を荷ひ、材を運びて、立ち所よ、造りゆで
よきまゝ、醍醐天皇も、仁慈の御心、深くおをし
て、常よ、民を、勞をり給ひけるが、寒夜の、殊よ、堪
へ難きよ、つゞくと、貧民の上をおほし、やらせ給
ひて、故さらよ、御衣を脱ぎて、夜の御殿より、投げ
ゆで給ひ、一條天皇も、寒夜よ、御直衣を、脱がせ給
ひて、おをし、けれむ、上東門院、驚き給ひて、かゝる
夜よ、など、斯くを、せさ、世給ふぞと、向も世、給ひけ
れむ、民も、さぞ、な寒むらんよ、朕ひとり、暖らよ、
寝くらんを、無情なれむと、宣ひ、まゝ、後醍醐天皇

も、世の安穩を、念々よ、祈り給ひて、三十一字よ、其
御意を、述べ給ひき。世治まり、民安うれと、祈ら
るそ、我が身よ、盡きぬ、思ひなり、けれ。代々の天皇
の、民を、恵み給へること、親の、其子を、思ふより、も、
深けれむ、君を、思ふ人の、殊よ、本邦よ、多うるも、亦
自ら、なる、埋りなるべし。

民のこころ 新千載集 荒小田よ、まうする水も、豊う、なる、
民の心も、に、ごら、ずも、が、な。

本邦の人も、おほう、五伴緒の如く、天孫よ、仕へ
奉り、諸族ども、の、裔孫なれむ、上古も、家々、其職
を、傳へて、奉侍せしこと、其父祖の、嘗て、天孫よ、奉

侍せীগが如くなりき。されむ、君の一系なるを、固よりなれども、民も亦、一系なるもありて、君民の間、父子の如くなれむ、君も、毎よ、仁慈を御心とし給ひて、むろしを、支那の文物、印度の工藝をも移させられ、今も、廣く、西洋の學術をさへ採らせ給ひて、學校よ、德育、智育、體育の教へあり。海陸よ、汽船、瀛車の設けあり。兵員よ、國を守らせ、警察官よ、民を守らせ、偏よ、安穩を謀らせ給ふさま、さながら、親の子を育むが如く、功を稱して、姓をも賜ひ、勞を、いづもりて、名をも賜ふことあり

て、小子部といふ姓を、小子を集めて、功よ依りて、賜ひくなり。道臣命といふ名を、道よ功ありて、賜ひくなり。されむ、まゝ、民の君を、仰ぐさまも、子の親を、仰ぐが如くよして、朝命なりと聞きて、水火をも、避ぐるること無けれむ、假初めよも、君子對うひて、不敬の舉動ある時を、世人の、惡み嫌ふこと、四隣の、不孝の子を、惡むよりも甚しく、遂よ、朝敵必滅の、諺も、まゝ、必滅の、實も、行なれて、蘇我入鹿も、ほろび、平將門も滅びよき。入鹿を、馬子の孫、蝦夷の子よして、馬子崇峻天皇の朝よ、物部

守屋を殺してより、一人朝政を専らみしりし
が、蝦夷入鹿に至りては、専横ますます甚しく、殊に
入鹿を二十餘人の皇族をもろしをひ潜りし、朝
廷をも覬ひけるを、天孫よ仕へ奉りし、天兒屋命
五伴緒の一人の後裔よ、中臣鎌足といふあり、深く、蘇我
氏の跋扈を憤り、法興寺といふに、蹴鞠の御遊あ
るを、便りとして、中大兄皇子とかさうひ、千辛萬
苦の間よ、討賊の謀を定め、皇極天皇の四年、韓使
入朝の機會を得て、遂に、入鹿を、朝堂よて、斬り殺
し、更よ、蝦夷をも、攻め滅ぼしければ、中大兄皇子

御即位ありて、天智天皇と申しける時、藤原とい
ふ、姓を賜もり、子孫代々、攝關となりて、朝廷を輔
佐し奉りき、鎌足の勲功固より多しと雖ども、朝
廷の賞を重くして、勞よ、報い給ふこと、誠よ、いふ
むらり無ければ、忠義を競ひて、王事よ、勞するも
の、いよく衆く、彼の、天慶の亂の如く、平將門、桓武天皇
の子新皇と自稱し、都を、下總國、猿島郡、石井郷よ
建て、坂東諸國を、攻め、後へて、勢ひ、きまめて、猖獗
なりしよ、藤原純友も、伊豫國よ、據りて、將門よ、應
じ、東西一時よ、騷動せしよ、藤原秀郷、平貞盛を

助けて、將門を滅ぼし、純友も、やがて、小野好古源
經基等も滅ぼされしとき、當時、秀郷も、東國に在り
て、未、朝命をも受けざれども、朝敵なりと、知られ
し、まゝ、片時も猶豫せず、一族を勧め、郎黨を催
ほして、直ち、不、俱、戴、天、の、大、賊、を、殺、し、し、り、き、藤
氏、衰、へ、て、平、氏、榮、え、平、氏、止、び、て、源、氏、起、り、し、を、史
上の順序なるが、藤氏の世も、出でしこと、既に、勤
王も、基、け、む、平、氏、源、氏、の、起、り、し、も、その、う、み、他、事
も、依、ら、ざ、り、し、を、知、る、べ、し、平、氏、を、貞、盛、が、將、門、征
伐の功も、根、ざ、し、源、氏、を、經、基、が、純、友、討、滅、の、功、を

本とせり、貞盛、經基、當初、功、勲、あり、し、より、朝、恩、頓
み、よ、加、を、り、て、子、孫、漸、く、榮、達、し、向、ひ、し、ま、ゝ、よ、世
間、も、を、と、め、て、平、源、の、尊、重、す、べ、き、を、知、り、ぬ、さ、れ
む、世、人、が、平、源、を、尊、重、す、る、を、朝、恩、の、加、を、り、る、故
よ、て、平、源、を、尊、重、す、る、や、が、て、朝、廷、を、尊、重、す、る、よ、
外、な、ら、ぬ、む、後、世、平、源、の、跋、扈、せ、し、も、朝、廷、の、御、
ざ、な、り、し、を、知、る、べ、し、民、の、君、を、尊、ぶ、餘、り、せ、め、て
其、事、も、頌、う、る、を、ぶ、よ、人、世、無、限、の、榮、譽、な、り、と、思
ひ、し、う、を、兵、士、の、六、衛、府、よ、り、歸、郷、せ、る、を、嘗、て、其
奉、職、せ、し、衛、府、の、名、を、稱、し、て、隣、保、も、誇、り、つ、と、終

國のさき...
よ諸國到る處として、左衛門、右衛門、左兵衛、右兵衛を、名のらぬ者なく、平左衛門を、平氏の、左衛門の意、源兵衛を、源氏の、兵衛の意よて、朝廷の賜ひける、平源の、姓を冒し、朝廷の建てられける、衛門、兵衛の、官を名のりて、潜りよ、名譽の一部分を、領め得らる、思ひをなせり。されむ、君を思ふ、誠心を、國を思ふ、誠心ともなりて、古來、忠君愛國の人も、多く聞えけるが、調吉士伊企いせ、欽明天皇の朝よ、大將軍紀男きのを鷹たかよ、隨ひて、新羅征討の、軍中よ在りて、軍敗れ、虜となれるよ、君を思ひ、國を思ふ心

いよく堅く、新羅の、欺きすらすを、聴かず、更よ、白刃を閃めりされ、其禪を脱がれ、其聲をゆゞされ、て、日本の將聲を、飲へと、呼べと、迫られ、けれむ、憤怒よ、堪へず、大よ、叫びて、新羅王、我が聲を、飲へと、罵りつゝ、遂よ、そとよて、殺され、りしが、其妻、大葉子が、捕へられ、る時、歌ひける歌よ、
韓國の、城のべよ、立ちて、大葉子を、ひね、あらすも、大和へ向きて、まゝ、大伴部博麻かほを、齊明天皇の御時、官軍よ、後ひて、韓地よ、渡り、百濟を、救ひて、大よ、唐軍と戦ひ、終よ、虜となりて、唐よ、護送せられ、けるが、天

智天皇の朝、土師富杼、氷老等、唐に在りて、唐人の謀を聞き知り、歸朝して、急を奏せんと志けれども、路用なきに、蹶踏せりと聞き、富杼等を見え、て、いふやうに聞くならう、汝今、國家の大事をもて、歸朝せんとして、路用の為め、支へらるるとり、我れを、既に、我が身の還らまじきを知り、まゝ、朝恩を報ゆまじきを知れを、責めても、犬馬の身を賣りて、乞に、汝が為め、路用を調ふ可しとて、やがて、身を賣りて、富杼等を還らしめて、ひとり、唐に留りしこと、三十年、持統天皇の四年といふに至

り、辛うとて、新羅の使に從ひて、歸朝しければ、天皇深く、其忠節を憐れみ、給ひて、務大肆といふ位を賜ひ、絁綿、布、稻、及び、水田、四町を賜ひ、殊に、まゝ、三族の課役をも、免し給へりしが、此人、遠く、異域に在りながら、朝家を忘れず、終に、一身を、犠牲として、國恩を報いんと期りし、誠は、鬼神をも、感動すべし。まゝ、近く、寛永の頃、長崎に、濱田弥兵衛といふあり。常に、商船に乗りて、海外諸國を往来し、外國語も、通じりしが、長崎の代官、末次平藏の商船、印度に通ひける途中、臺灣海を過ぐと

て、紅毛人よ、貨物を奪われ、幸く遁れ還りけるを、
平藏怒りて、是れ私の損失ならず、公の損失、國家
の恥辱なり。報いでやを置くべきとして、幕府よ請
ひて、復讐の許しを受け、すなわち、弥兵衛を誘ら
ひけるよ、剛勇無雙の聞えある、弥兵衛を争て、
怒らざらん。満面、聞くまゝよ、血をそそぎて、
や、國辱雪ぐ可くとて、直ちよ、子の新藏、弟の小左
衛門、及び、従卒數百人と、みな、蓑笠を着て、農夫よ
装ひ、移住の民と稱して、臺灣よ渡り、幸うして、甲
比丹よ見せしむるを、一家を借りて、留らんと請ふ

よ、許さず。亦、放ち還すべくもあらで、數月を経る
間、弥兵衛、時至りぬと、悦び、新藏、小左衛門等よ、い
ふやう、甲比丹、余等の、上陸を諺ひつゝ、一家をぶ
よも貸さず。亦、本國よ、還るをも許さず。進退、既よ
窮まりぬれむ、死を決して、勉めざる可らずとて、
従卒を、城外よのこゝ、新藏等、二人を伴ひ、夜の
ほのぐ、明けよ、不意よ、城門を押し破り、甲比丹が
卧床よ突き入り、左手をのこして、其ふゝめきあ
りて、遁れんとするを、搦く、右手よ、短刀を、閃め
りしければ、數百の紅毛人、驚き騒ぎて、救せんと、

群がり来されど、新藏等が、振り鬻ぎす、日本刀も、
え前まず、且つ、既よ、甲比丹の質よ、取られしを
見て、たゞ、徒らよ、辨めきけるが、甲比丹を、ひらす
ら、助命を乞ひて、止まねむ、弥兵衛を、先づ、城上の
大砲を、取り除けしめ、嚮よ、掠め取りし、貨物を、固
より、數倍の、贖罪を命じ、更よ、甲比丹をも、伴をん
とせし、が、甲比丹あらざらば、島民治らばと、歎き請
ふまゝよ、其子の、十二歳よなると、他の、紅毛人と
を、拉く還りしを、平藏を、更よもつを、幕府も、
深く、其功勞を賞して、弥兵衛の名を、一時、海外よ

も轟きよき。愛國の一念を、斯く、剛勇の、氣象とも
なれむ、剛勇の人も、亦、殊よ、本邦よ多くして、同
頃、山田長正も、海外を驚らせり。長正も、伊勢の人
よて、織田信長の、後なりとら、幼なきより、武勇を
好みて、常よ、功名を、一世よ、立てんと思へりける
が、當時、大亂、新よ治まりて、人みな、太平を悦び
ける間、風雲の、機會もなくして、功名の、立ち可く
もあらざりけれむ、ゆがで、海外よ、出でし、が、にも、
平生の、志をと、思ひ起ち、商船よ、乗りて、先づ、臺灣
よ渡り、まゝ、暹羅よ渡りけるよ、暹羅國を、其頃、六

昆國と兵を交へて、年々戦争絶えざりしが、或時
まゝ敵を禦がんとて、出兵するを見ければ、軍律
調えず、隊伍亂れ、うるを見て、斯くても、必ず敗れ
なんと、つぶやきけるよ、果して大敗して還りけ
れむ、暹羅王、大に驚き、急よ、長正を召し出で、上
將軍とし、再び、兵を發して、六昆を禦がせけるよ、
長正、種々の奇計を設け、大に敵軍を破りて、北ぐ
るを追ひつゝ、長驅して、都入り、其王をも、捕
し、つむ、長正の威名、頓みよ、遠邇に震ひ、近傍の諸
國、争ひて、暹羅に從ひ、一國、國王の悦び、大方なら

ず、厚く、其功を賞して、我が女を娶せ、まゝ、六昆、お
よび、匹皮留といふよ、封じて、國主となし、更よ、暹
羅の國政をも、執らせけるが、長正を、斯く、意のま
まに、顯達して、異域にも、在るものから、暫らくも、
故國を、忘れず、如何も、もして、國威を、海外に、示さ
むやと、遂よ、王に、勸めて、來聘せしめ、つりきとぞ。
まゝ、彼の、北條時宗の、勇斷も、愛國の、一念よ、外な
らず、時宗も、龜山天皇の、御時、鎌倉の、執權なりけ
るが、をりしも、支那北方の、蒙古國、強大を、極めて、
遂よ、宋を、滅ぼし、勢ひよ、乘りて、本邦をも、從くん

と欲し、朝鮮を便りて、書を遣りける間、朝議を答
書をもとおぼしむるに、時宗其書辭の無禮なる
を怒りて、答書も及ばず、直ち使者を逐ひ還
しき、斯く使者を逐ふこと、前後五六度も至り
ければ、後宇多天皇の文永十一年、蒙古の兵三萬
を遣り、壹岐對馬を來りしを、時宗鎮西の諸將に
命じて、悉く逐ひ攘りせしめ、建治元年、蒙古
の使者杜世忠、何文著等、長門を來りて、答書を
求め、去らざりし。時宗大に怒りて、鎌倉に護送し、遂
に其首を刎ねて、全く拒絶を示し、更に北條實政

をもて、鎮西の探題とし、將士を總べて、其來寇を
備へしめ、まことに朝鮮をも征せん為め、戰艦をも
備へしめ、其未發せざりし間、弘安四年、蒙古
の將范文虎、舟師數千艘を率て、壹岐對馬を寇し
つゝ、太宰府を攻め來りしを、實政諸將と、連
日拒ぎ戦ひて、鷹島を逐ひけるに、一夜大風吹き
起りて、怒濤天を漲り、賊艦を捲き連ねて、或ひを
破り、或ひを覆へすに、諸將更に勢ひを得て、輕舟
を漕ぎ廻らし、四面より、鏖殺しつゝ、降を請ふ者
千餘人をさへし、斬りて、十萬の賊兵僅らし、三人

を餘し、もぞ、本邦の武名、四海よ轟き、支那千古の猛將と聞えける。蒙古王、忽必烈も、かきぬて、邊境を窺し、もぞりしを、併しなかり、時宗が國辱を受けしと競ひし、精神の壯んなりしよ、依れり。文禄よ、豊臣太閤の、朝鮮を征せしも、わと、時宗の遺志を継ぎてなり。太閤秀吉、常よ、蒙古の、我れよ、寇せしを憤り、且つ、朝鮮の、蒙古を導き来りしを、憤りけるが、小田原の一戦より、威風草木を靡りし、て、一天四海、無事なりし間、朝鮮の來聘せしよ、便宜を得て、平生の志を遂げんと思ひ、朝鮮王、李昞

よ、書を遺りて、我が兵の、郷導となりて、明國よ入るべしと、催し、が、李昞、明を怖れて、答へざるにせざりければ、更よ、柳川調信、僧玄蘊を遣りて、秀吉、今、明よ入りて、其四百餘州を、邦俗よ、化せんとすなり。朝鮮、若し、命よ從はずむ、全地、焦土よ變ずべしと、告げしめければ、尚、明を憚りて、答へざりければ、今もと、戦艦、數百艘を造り、盛んよ、兵食を具へて、先づ、朝鮮より、征せんとす。是時、後陽成天皇の、文禄元年、秀吉、京師を發するよ、當り、或人、漢文よ、通せざる者を、勧めければ、秀吉、笑ひて、い

國のすゝめ
く、吾れを、彼れよ、我が文を用ひしめんとすなり
とて、遂よ、肥前の名護屋に陣し、浮田秀家を元帥
とし、増田長盛、石田三成等を參謀とし、加藤清正、
小西行長を先鋒とし、十餘萬の兵を従へしめて、
朝鮮を征せしむ。行長先づ、慶尚道を下し、清正、慶
州を畧して、行長と、與よ、忠州に會し、更よ、路を分
けて、國都に迫りければ、李昫怖れて、平壤に、出奔
し、秀家等、かゝりて、國都、漢城に入りぬ。此時、清正
を、まよ、遙ろよ、二王子を追ひて、兀良哈の境に至
り、其從官百餘人をも、擒よし、行長を、まよ、進みて

平壤を襲ひて、李昫を、義州に逐ひ、留守の將、尹斗
壽等を、撃ち、明の援兵を、破りて、其將、祖承訓を、走
らせ、史儒を、斬りき。明主、まよ、五萬の精兵を、發し
て、李如松を、大將軍とし、再び、朝鮮に、向せしめ、
如松、やがて、平壤を、攻めて、行長を、逐ひ、勝つよ
乗りて、轉戦して、小早川隆景と、碧蹄館に、戦ひて、
大よ、破れ、却て、一萬餘兵を、亡らし、坡州に、退き
しり。明主、其終よ、當らまよ、きを、覺り、石星の、謀よ
従ひて、沈惟敬を、行長の、許に、遣し、和議を、請ひ
て、秀吉を、王に、封じ、朝鮮の、三道を、割らしむべし

と説くしめけるよ、行長封王の謂れを知らず是れ必ず秀吉を明王よ封するならんと、思ひとり和議を名護屋よ報して、惟敬を秀吉よ謁せしめければ、秀吉すまをもち、小西如安よ命して、俱よ明國よ起らしめ、且つ、朝鮮の俘囚を還し、諸將の進撃を止めしりしが、是れより先き、秀吉、諸將の晋州を攻めて、敗れぬと聞き、大よ怒りて、復急よ、晋州を攻めしめけるよ、城堅うして、抜けざりければ、清正、龜甲車を造り、死士を載せて、城足を穿ち、樓櫓を崩して、先登し、遂よ、城將、徐禮元を斬り、六

萬餘人を鏖よしけるよ、韓人、清正を畏るこ
と、鬼神の如く、相傳へて、鬼上官と、呼び做しり
し。是時、惟敬よ、なほ、朝鮮よ在りけるが、晋州の變
を聞き、其和議の約よ、違ふを詰りて、行長よ見え
ければ、行長、怒りて、つとく、汝、和議を請ひて、後、明
兵、頻りよ、朝鮮よ入るも如何、惟敬、答あること、能
まざ、如安と、相携へて、北京よ入り、如松を召し還
して、和議、漸く、調ひければ、外征の諸將も、惟敬、及
び、明使、韓使を、偕ひ、還りて、秀吉よ謁せしめける
間、秀吉、明使の奉れる、明服を着け、封冊を讀まし

めて、つゞぐと、聴き居ける程も、汝を封トて、日本
國王とすと、讀むとひくく、顔色、みろく變りて、
忽ち、冕服を擲みて、地上に抛ち、冊書を、縦横に、引
き裂きつゝ、日本の國王よ、何ぞ、彼れが、封を、須ひ
ん、況や、吾れ、國王とらむ、天皇を、如何と、大に怒り
て、行長を、誅せんとするを、諸將、交るぐ、諫め止め
けれむ、即夜、明韓の、使者を、逐ひ、再び、兵を、發して、
朝鮮を、征す。小早川秀秋を、元帥となり、黒田孝高
を、參謀となり、他の諸將を、前役の如くして、殊も、
行長に命トて、功を、立て、前過を、償ふ。清正

先づ、入りて、西生浦に屯し、行長を、釜山に屯し、け
れむ、李昞、まゝ、海州に奔りぬ。明主、大に驚きて、刑
玠を、總督とし、大軍を、發して、朝鮮を、救ふ。水軍の
將、藤堂高虎、加藤嘉明等、唐島、及び、閑山島を、攻め
て、韓將、元鈞を、煮らせ、行長、まゝ、絶影島を、撃ちて、
元鈞を、斬り、南海、順天を、拔きて、清正と、軍を、合せ
て、黄石城を、取り、遂に、大に、進みて、慶尚、全羅の、二
道を、定め、行長を、順天を、守り、清正を、蔚山を、守り
ぬ。是時、明將、刑玠、既に、韓に、入り、明韓の、兵、數十萬
を、將て、蔚山を、圍みて、其、汲道を、絶たり。然れども、

清正等の剛勇なる、いりてうを、飢渴も屈せん。馬血を啜り、馬溺を飲み、土を食ひ、紙を噛みつゝ、孤城を守りて、遂も落ちざりし間、明韓の兵、俄りも圍みを解きて、秀秋等の援兵を避くるを見て、清正等、大門を開きて、突出し、追躡して、大に破り、斬獲數へもあへざりけるも、諸將をほ勢ひも乗りて、諸道を蹂躪し、進んで、明も、はらんと志けらるが、是時しも、秀吉病ひ起りて、日夜漸くおちるまゝ、よ、外征半途よして、終も、其兵を收めしめよき。京師の耳塚を、此朝鮮の役もて、獲りて、馘り耳

の塚なりとぞ、當時、若し、太閤も、年を假さむ、亞細亞大陸の地圖を、滿州と、同色よを、染まざらまし。文化の進歩も、滿州の跡を追ひてを、履まざらまし。進取も、富めらるを、本邦人の特性よして、剛勇活潑なるも、亦、本邦人の、天性なれむ、太閤決して、古人よあらず。必ず、東山、三百年の、青苔を掃ひて、枯骨を、呼び起す、壯士もあるべく、新しよ、太閤を生む、父母も、有るべし。世運、いよく開け、文化、ますます、進む時を、茫々として、前途、岐路、蛛手の如く、孰れの路を履みて、國民の、本道よを、出づべき。必ず、先

輩を榮りとして、念々、君を思ひ、念々、國を思ひし、
正路より、行りざる可らず。殊に、忠君を、本邦特有
の美德よして、禍福も、其明を、蔽ふこと能をぬむ、
艱難、いづれ、屈撓するを得ん。彼の、和氣清磨が、
刀鋸の上よ在りて、顔色の變らざりし、菅原道真
が、配所よ在りて、恩賜の、御衣を、拜せし類ひ、數ふ
るよ、違あらず。清磨も、稱徳天皇の朝の人なり。天
皇、弓削道鏡を寵して、太政大臣禪師とし、まゝ、法
王とし、給ひしより、威權、赫々として、天日の昇る
が如く、大小の政務、意の儘なるまゝ、終り、まゝ、

非望の念を生じ、中臣阿蘇磨が、宇佐の神教と稱
せし、諛言を餌として、竊り、天位を、釣らんと謀
り、道鏡を、天皇とせむ、天下太平ならんと、奏せし
め、ければ、天皇、其眞偽を、決せん為め、清磨を召
して、宇佐よ遣らし、更、神教を、請をしめ、給ふ間、
道鏡、眼を瞑らし、劍を按りて、清磨を、にらみつゝ、
汝、神教を、誤らず、よく、我が志を、遂げしめむ、太政
大臣として、報いつべし。若し、我が、此言よ違ひて、
前の、神教を、誤らむ、禍必ず及ぶんと、諭しける
が、清磨が、忠勇なる、いづれ、死生、二途の為め、

其志を變へん。松柏の霜を経て、いよく榮ゆるが如く、宇佐より還りて、直ち神教を奏するやう我が國家を開闢以來、君臣分定れり。天津日嗣を必ず皇緒を立つべく、無道の人を除くべし。是れ神教なりと奏しければ、道鏡大に怒りて、清磨が官を解き、名を穢磨と改めて、大隅國に流し、密りよ、途みて殺さんとし、けるを雷雨晦冥に會ひて、ためらふ間、勅使来りて、幸く助りて、配所に在りしが、光仁天皇御即位の後、道鏡を配流せられ、清磨を召されて、本官に復し、まきまき、

道真を醍醐天皇の朝に右大臣となりて、左大臣藤原時平と、與に朝政に參ぜし、時平常に道真の時望ありて、殊遇を受くるを、猜みけるが、或時宇多上皇の天皇と議りて、道真をもて、關白とすと、いふを聞き、其黨數人と結び、讒を構へて、遂に太宰權帥に貶せり。然れども、道真を露をうりも、君を恨むる、心をく朝夕天恩の辱りりを忘れず。常に九重の空、懐りし、眺め遣りし、九月十日よもなりければ、まき、更に、去年の事、思ひ出でられて、懷舊の情、遣ら方なく、詩を作りて、自ら慰

めしりしが其詩も、去年今夜侍清涼秋思詩篇獨、
斷腸恩賜御衣今在此、捧持毎日拜餘香といひり。
さて終に配所まで薨せしが、後にも贈官贈位等
もありて、北野に祀られしり。まゝ楠氏に至りて
も一族郎黨悉く王事に斃れて累世一人の生を
貪る者なく、純忠純烈東西よりしり、古今よとほ
りて比類なきを固よりなるが、これらの人々の
獨り我邦に生れしも亦も偶然もあらざるな
り。楠正成も後醍醐天皇の朝の人なり。天皇鎌倉
を滅ぼさんと謀りて、潜りし笠置に逃れ給ひ、正

成を召して其策を問ひせ給ひける時、正成奏す
るやう、天誅を蒙る者、いつてうも斃れざらん。然
れども、勝敗も本、兵家の常なり。一敗よりて、其
志氣を沮喪すべきはあらぬを、正成猶在りとご
よ、聞召さむ、復御心をな惱まさせそ。正成必ず身
を、此事に委ねべしとて、乃ち郎黨五百人を將て、
初めて赤坂城に籠りてより、千辛萬苦の間志を
く、奇策を設けて、賊兵を挫き、東軍の破り易き
を示して、暗に四方勤王の志氣を煽ぎ、遂に鎌倉
方なら、足利尊氏、新田義貞等を、叛らしめて、北條

高時を滅ぼし、天皇の隠岐より還らせ給ふと聞
き、兵庫より出でて、迎へ奉りければ、限りなく、悦を
せ給ひて、大業の速らよ成れるを皆偏へよ、汝が
力ぞと、勞ひ給ひつゝ、やがて、前驅を命じて、京師
よ、入らせ給ひけるよ、足利尊氏が、謀反よ及びて、
まゝ、屢々、賊軍を破りし、延元元年、尊氏弟直義
と、九州の、大軍を率て、水陸二道より攻め上ると
聞え、間、正成、疲兵の、當るまゝ、きを論じて、一
時、其銳を避けんと、奏しけれども、朝議、都外の戰
ひよ決せしむむ、必ず、敗れぬとを、知るものうら

朝命、亦、黙し難く、弟、正季、子、正行と、闕を辭して、行
く、櫻井驛よ至れる時、正行よ、いふやう、此一戦、
誠よ、天下の、安危を決すべくして、思ふよ、吾れ、復
再び、汝を見し、吾れ、若し、死なむ、天下、必ず、足利氏
よ歸らん、然りとも、正行よ、汝、禍福よ誘われて、
父が、忠義を、空くすること勿れ、一人も郎黨の、あ
らん限りも、千窟の、舊趾を守りて、父が、志を継ぎ
ぬ、汝が、世の、孝養を、唯よ、此一事よ、止るぞと、
恩賜の、寶刀を、授け置き、正行の、往らんと、いふを、
且ら叱り、且ら諭して、強ひて、故郷の、河内よ還し

遂に進みて、湊川に陣す。其兵僅らぬ七百餘騎、直ち、直義の陣に突入り、奮戦縦横、殆んど直義を獲んとして、あやなく、尊氏に遮ぎられ、更らぬ馬を回くして、其兵と相當りつゝ、血戦十六合にして、遙らに顧みれぬ、從騎の大抵亡び、うろを見、て、今をとして、走りて、近傍の民舎に入り、鎧を釋きながら、正季に向ひ、死後、更に、何事を為さんと、いひけれぬ、正季、いふやう、顧みくを、七つび、人間に生れて、國賊を滅ぼさまし。正成、欣然として、打ちながら、遂に、互ひに、刺し貫きて、亡せぬ。時、歳

四十三、一族十六人、殘兵五十餘人、皆盡く、殉死せり。正行、父に別れ、時、年十一、故郷に還りて、遙らに、湊川の音信を聞き、遺恨、今更に、遣ら方なく、竹馬を走らせても、國賊を追ふと呼び、木刀を打揮りても、尊氏を斬ると叫び、春と過ぎ、秋と送りて、つゝと長どけらぬ、天皇、大和に逃れ、ゆで給ひぬと、聞とえけれぬ、從弟、和田正朝等と、駕を護りて、吉野に入り、志むく、賊軍を惱ましく、更に、京師を復せんと謀り、細川顯氏を撃ちて、譽田林に追ひ、山名時氏を襲ひて、瓜生野に破りしより、

尊氏の憂懼、大方ならず、高師直を大将とし、二十餘州の大軍を發して、雌雄を一舉に決せしめんとす。是時、南朝も、正平三年より、後醍醐天皇を、既に崩じ、後村上天皇、新しよ、立させ給へり。正行、弟正時等と、行宮に詣りて、奏すらくも、先臣、正成、嘗て、微力をもちて、強賊を挫き、一度、震憂を慰め奉りしも、天下、復亂れて、湊川の戦、身を、泡沫に委ねたり。當時、臣、未、幼なく、偏へよ、遺命を守りて、故郷に還り、かろく、餘燼を收めて、時機を待ちつゝ、今、既に長じて、幸ひよ、大敵に會へり。若し、此時

を失ひて、一旦、不測の疾ひに罹らむ、上よも、不忠の臣となり、下よも、不孝の子とならむべし。されむ、此一戦、眞に、臣が、命を効すべき、秋よりして、臣、若し、彼れが、首を獲らむ、彼れ、必ず、臣が、首を獲ん。唯願そくむ、一度、天顏を拜して往うんと、嗚咽して奏しければ、天皇、高く、簾を捲りせて、遙らよ、正行を視給ひつゝ、懇らよ、勞をり給へむ、正行、ますく感泣し、乃ち、先づ、先帝の廟を拜し、族黨、百四十三人の姓名を、如意輪堂の壁に、あるし、更よ、一首の歌を書き添へり。還らんと、かぬて思へむ、梓

弓なき數よ入る、名をぞとむる。斯くて、四條暇
よ陣し、師直が陣を突きて、奮戦すること、巳刻よ
り、申刻よ至りて、斬獲數を知らず、百方奔馳して、
師直を狙ひしうども、賊の連射、雨の如く、偏身い
とづらよ、箭を負ひて、今も如何すべくもあらぬ
む、遂よ、正時と、相刺して卧しり。時よ、年二十二、
殘兵も、亦悉く自殺しき。古よ、いらく、君も、君と
あらずとも、臣も、臣とあり可しとぞ、況して、君の
恵み深うけれむ、民の心、淺ぶ可きよをあらぬと、
本邦よ生れん人も、何もありとも、祖先の心を、心

とするをぞ、誠なる、心とを言をまし。むろし、聖武
天皇、東大寺行幸の時、天皇、臣民よ、詔して、汝ら
の祖^{おや}どもの言ひ来らく、海行らむ、みづく、屍、山行
らむ、草むす屍、大君の邊よ、こそ、死なめとなむ、聞
こしめす、云々、子を、祖の如く、あるべしと、宣ひて、
位を賜ひ物を賜へりしも、今のやうもぞ、覺ゆる
たうが、爰よ、猶つらく、維新の、鴻業を思ふよ、上よ
述へしが、かく、幕府の、政權を返上せし、當る諸
藩も、競ひて、藩籍を奉還し、數百年來組織せし、封
建を、一朝よ解きて、古今の史上よ、ためしなき、大

國のすぐる字引
 變をも現も〜、當時、自然の勢ひなりと雖
 も、併しながら、大義名分を重んずる國風も誘を
 れ〜と依るべし。殊に彼の、臺灣の役も、兵士の武
 名を輝らし、支那との葛藤も、皆報國の念を懷
 き〜類ひも、固有の義勇も外ならずりき。然れど
 も、聖天子上におも〜、良弼下にお在りて、外も善
 隣の、まこととを失えず、内も、四民の幸福を保ち
 得て、文明日新の象を今日民煙の上よのぞむこ
 とを得〜、真よめ〜、國の姿よこそ、
 國のすぐる終

國のすぐる字引
 集ツグ二ニ集ツグ合カ體タイ全全疎ソ密ミツ全全疆キヤウ域キ全全廣カワ狹ケツ全全優ユウ全全開カイ關カン全全屹キ立リツ全全星セイ霜サウ全全外ガイ侮ブ全全
 剛ガウ勇ユウ全全弓コウ強キヤウ三三手サ未ミ全全耕ケウ耘エン全全早サウ魁クワイ全全霖リン雨ユ全全例レイ全全競キヤウ全全遭サウ遇ユ全全研ケン三三勵レイ
 睦ムツ全全航カウ海ハイ全全瓊キヤウ々々粹サイ尊ソウ全全御ミ璽シ全全草サウ薙ギ劍ケン全全八ハチ尺シツ曲キョク瓊キヤウ全全八ハチ咫シツ鏡キヤウ全全五ゴ伴バン
 緒キョ神カミ全全寶ハウ祚ソク全全無ム窮キヤウ全全檀タン原ゲン全全靈レイ時ジ全全四シ淳ジュン全全池チ溝コウ全全難ナン波ハ全全隈ケイ全全課カ役ヤク全全壞クワイ
 漏ロウ全全繕セン全全衮コン龍リウ全全濕シツ全全眺トウ全全朕テン全全靡ミ五ゴ賑ジ全全直ジツ衣イ全全無ム情ジヤウ全全理リ六ロク裔エイ孫セン全全
 育イク全全道ドウ臣シン命メイ七七假カ初ソ全全嫌ケン全全蝦カ夷イ全全專セン橫コウ全全天テン兒イ全全屋ヤク命メイ全全跋ハツ扈コ全全蹴ソク鞠キク全全
 機キ會クワイ全全攝セツ關カン八ハチ輔ホ佐サ全全勲クン功コウ全全猖キヤウ獍メイ全全不フ俱ク戴タイ天テン全全討トウ滅メイ全全榮エイ達ダツ全全頓トン全全
 無ム限ゲン全全榮エイ譽ユ全全隣リン保ホ全全誇コウ全全冒マウ全全潛セン全全領レイ全全虜ロ全全閃セン全全禪セン全全腎ケン全全燄エン全全燄エン全全迫ソク
 遺イ恨ゲン全全堪カン全全叫キヤウ全全罵マ全全百ヒャク濟ジ全全踟チ躑ジ全全踏トウ全全純ジュン全全綿メン全全犧カシ牲シヤウ全全貨カ物ブツ全全道ドウ全全
 恥チ辱ジュク全全復フク讎チン全全爭シヤウ全全雪セツ全全義ギ笠カシ全全裝ソウ全全諾ダク全全卧ワ床トウ全全駁カク全全質シヤク全全嚮キヤウ全全嚮キヤウ全全掠ラク全全
 贖ジツ罪ズイ全全拉ラク全全車シャ轉テン全全氣キ象シヤウ全全暹セン羅ラ全全六ロク昆コン全全禦オ全全長チャウ驅ク全全遠ユエン通トウ全全顯ケン達ダツ全全來ライ聘ペイ全全

字引

勇斷全執權全鎮西全攘全杜世忠全何文著全列全拒絶全探題全來寇
 全戰艦全范文虎全鷹島全怒濤全漲全捲全漕全猛將全忽必烈全邊境
 全李治全焦上全慶尚道全平壤全元良哈全祖承訓全史儒全沈惟敬
 全謁全俘囚全晉州全樓櫓全慶全頻全詰全偕全冕服全摺全拋全縱
 横全西生浦全釜山全刑玠全總督全元鈞全絶影島全蔚山全汲道全
 吸全馬弱全齒全追躡全斬獲全蹂躪全截全特性全活潑全青苔全枯
 骨全歧路全蛛手全聚全艱難全屈撓全赫々全非望全諛言全餌全真偽
 全瞋全按全天津日嗣全皇緒全穢磨全晦冥全殊遇全猜全議全讒全構
 全太宰權帥全敗全辱全懷全懷舊全慰全累世全貪全純烈全沮喪全委
 全煽全疲兵全千窟全舊趾全遮全釋全殉死全揮全譽全田林全瓜生野
 全憂懼全泡沫全餘燼全罹全嗚咽全如意輪堂全梓弓全暇全奮戰全狙
 全連射全偏身全屍全宣全鴻業全組織全封建全葛藤全良弼全

明治二十年二月廿三日版權免許
 三月 開板

定價金十七錢

著者

三島通庸

出版人

平尾諦藏

發兌

明石範貞

書舖

宮川保全



鹿兒島縣士族

東京府士族

東京芝區三田四國町七番地

東京四谷區尾張町九番地

東京京橋區南鍋町二丁目三番地

東京神田區猿樂町三丁目三番地

十一堂支店

東京日本橋區橫山町二丁目三番地

瑞穂屋 東京日本橋區本町三丁目廿番地

三木 大阪心齋橋通北久寶寺町

賣捌所

